

いの流水俳壇

「当季雑詠」

友草 水月選

青山椒煮つめ昭和の顔すてず

伊藤 萩甫

〔評〕「山椒は小粒でもぴりりと辛い」との諺がある、勿論実のことである。小さくても才能がありしっかりしていると言おう例えである。実や若葉は食用、薬用、香辛料とする。

掲句は山椒の若葉を煮つめて佃煮にしている。独特の味と香気がある紫蘇や茗荷なども佃煮にする。こうした自然保存食を嗜む人達は昭和の戦中戦後の苦しい生活を生き抜いてきた気骨のある人間である。それが昭和の顔であり、その気概を捨てず生きてきたのである。この句は五点の高得点であった。

○芽山椒の舌刺す一茶の墓詣

野澤 節子

思ひ出のふつつ桑の実の熟るる

津田 久美

〔評〕桑の実と言えば私達の年代には懐かしい思い出がある。至る所に桑畑があり、七〜八月ごろ実が赤色から紫黒色となつて熟れた汁で甘酸っぱい味、唇を紫色に染めて食べたもので、童謡にも「山の畑の桑の実を小籠につんだはまぼろしか」とある。

作者も経験を思い出しての句であろう。思い出がまさに「ふつつ」と湧き出たのである。残念ながら今は養蚕が廃たれ桑畑は殆ど見かけなくなつたが、たまに川岸などに桑の自然木を見かけることがある。

○桑の実に少年の日の雨が降る

佐野 鬼人

揚げ物のあとは小梅の口直し

岡村 嘉夫

〔評〕身近な日常生活の一端を捉えての句である。油濃い揚げ物を食べた後に梅漬の小梅を食べたのである。口の中に残つた油が甘酸っぱい小梅でさっぱりした。これが口直しである。先に食べた物がまずかつたり、苦い菓などの味を消す為に甘い菓子やコーヒーなどの別の物を飲食することである。和食の弁当の小梅、カレーライスの福神漬などがそれである。俳句は特別な場所ではなく日常の生活で経験したことを十七文字にまとめればよいということになる。

○塩噴きしひね梅干を珍重す

富安 風生

紫陽花や凡夫一人の小宇宙

大川 節弥

〔評〕この句は心象的な句、難しく言えば哲学的な句である。凡夫とは色々な煩惱に迷っているおろかな人、心身に悩みを持つ人間などを意味するが、掲句の凡夫とは普通のひとと軽く捉えてよいと思う。小宇宙とは宇宙の一部でありながら独立した宇宙であり、人間作者自身である。日常生活の中で身体的にも精神的にも苦痛の中で悩みながら生きている私(作者)である。なお紫陽花は季語で句とは直接意味はない。

○あぢさゐや生き残るもの喪に服し

鈴木真砂女

二句抄

波のうた星のうた聞く夏灯台

間 浩太

抽斗の奥の潮鳴り夏の浜

川村 博子

鮎漁を飽きず見ている橋の上

薄がすみ窓の大杉凜として

竹崎 光子

余生には余生の仕事らつきよ振る

欲張りて挽ぐ手零るる小梅かな

竹崎 光子

労働の汗の香りの勇ましい

竹崎たかひろ

ひと時を心にも射す梅雨晴間

井上 郁子

若葉光白髪が目立つ富士額

濱田美智子

屋根なしの風呂の記憶や梅雨の月

森岡 照月

テフテフと書いた父の七回忌

伊藤 萩甫

身の丈を自問自答や花まつり

津田 久美

競い合う二本の枝葉花南瓜

岡村 嘉夫

空梅雨や元氣なくした庭の花

大川 節弥

枇杷もぎしはるかな父の肩車

友草 水月

一人身は気楽で淋しい額の花

水月

痒みあり生の証か梅雨の夜

大川 節弥

五月雨や故郷に人の死すと聞く

友草 水月

花樽解かぬ龍馬の懐手

友草 水月

竹林の影は流さず梅雨の川

友草 水月

駄筆一言

七月号で俳句は自然や事象をよく見ることから始まると述べました。私達の五感(見る、聞く、嗅ぐ、触れる、味わう)を通すことです。

○五月雨の降り残してや光堂

約八百年前藤原氏が建立その五百年後に芭蕉が「奥の細道」の紀行中、平泉を訪れこの句を詠んでいます。光堂とは金色堂のことです。

芭蕉の多くの俳句の中でも十指に入る名句といわれます。

五月雨の中に金箔で鮮やかな金色堂を見て

の句で周囲の建物は年月を経て風雨で朽ちているのに光堂だけは五月雨にも濡れてないかのよう

に輝いているというのです。

「降り残してや」この表現が素晴らしいのです。

(続く)

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597 画 89312012



盆提灯・ト一口一

多数展示してご来店をお待ちしております

県内配達無料・県外へも発送できます

家紋入り提灯のご予約も承ります

水棚一式 ¥29,800

お仏壇も
特価でご奉仕中!

有料広告

仏壇・仏具・神棚・神具

おおくら仏具店

いの町新町15(高知銀行斜め前)

tel 088-893-0122

営業時間

午前9時~午後7時